

私たちの生協は今年、20 歳になります。

新潟県立大学がまだ 7 歳なのに!?!と驚くでしょうか。生協が誕生したのは、1996 年 10 月でした。本学の前身である、新潟県立女子短期大学の学生と教職員が力を合わせて設立し、大切に育ててきました。2009 年からは新潟県立大学の生協となって、今日に至っていますが、これからも大学と共に歴史を重ねていき、みなさんの学生生活を一番近くで支える存在であり続けたいと願っています。

この「どこでもドアのかぎ」も、生協と一緒に誕生しました。残念ながら何回かお休みがあって、第 20 号ではないのですが・・・今回は 3 年ぶりの復活です。よい本に出会うための架け橋になりますように。

今号の特集は「戦争の本・平和の本」です。ご存じのように、2015 年は、第二次世界大戦の終結から 70 年という、大きな節目の年でした。憲法をめぐる議論の声も高まり、世の中が大きく方向転換をするかもしれない、このような時に何よりも大切なのは、しっかりと学び、自分の頭で考えること、自分の目で物事を見ること、自分の意見を持つことだと思います。教えられるのを待つ人ではなく、自ら学ぶ人になりましょう。本という扉を、自分の手で開いてください。

新潟県立大学生生活協同組合
教職員フォーラム

どこでもドアのかぎ 2016 目次

小谷一明	(国際地域学部 国際地域学科)	1
石川伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	3
山中知彦	(国際地域学部 国際地域学科)	6
太田正之	(国際地域学部 国際地域学科)	7
黒田俊郎	(国際地域学部 国際地域学科)	8
堀江薫	(国際地域学部 国際地域学科)	9
福嶋秩子	(国際地域学部 国際地域学科)	10
水上則子	(国際地域学部 国際地域学科)	11

特集「戦争の本・平和の本」

福嶋秩子	(国際地域学部 国際地域学科)	14
小谷一明	(国際地域学部 国際地域学科)	15
福本圭介	(国際地域学部 国際地域学科)	16
小澤薫	(人間生活学部 子ども学科)	21
石井玲子	(人間生活学部 子ども学科)	22
石川伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	23
山中知彦	(国際地域学部 国際地域学科)	25
黒田俊郎	(国際地域学部 国際地域学科)	27
水上則子	(国際地域学部 国際地域学科)	28

チェルノブイリの祈りー未来の物語

スベトラーナ・アレクシエービッチ 松本妙子訳
岩波現代文庫(2011)

2015年のノーベル文学賞受賞者の本。読み始めて『よい戦争』を書いたアメリカのスタッズ・ターケルを思い出した。彼は終生こつこつと「名も無き人」へのインタビューを続けたジャーナリストである。この本も同じように丁寧にインタビューが編纂されており、気づくと夢中になって読んでいた。1986年の原発事故を基点にチェルノブイリ周辺で暮らす人、暮らしていた人の言葉がさまざまに紡ぎ出される。事故後にチェルノブイリで暮らし始めたタジク人、射殺した犬や猫を思い出すハンター。読みながら驚き、ため息をついた。タルコフスキーの映画『惑星ソラリス』や『ストーカー』の風景がちらちらと眼裏をよぎる。会話には1937年の大粛正、独ソ戦、ハティニ（カチン）の虐殺、アフガンからチェチェン戦争まで入り込む。ヒロシマという言葉がサーロ（ベーコンのような肉）という言葉と隣りあう現実。繰り返し読むことになるだろうと思う。なお作者名の翻訳はスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチであってほしかった。

深沢夏衣作品集

深沢夏衣 新幹社(2015)

ひとかどの父へ

深沢潮 朝日新聞社(2015)

2015 年終わりの頃、深沢という姓の読み方に、ふかさわとふかざわがあることを知った。ふかさわのほうの深沢夏衣（かい）は新潟県出雲崎出身の作家で、数年前に亡くなった。代表作は「パールチャ打鈴」と「夜の子供」。日本国籍であるため日韓のはざまを生きることになった深沢に、1960—70 年代日韓社会の影が重くのしかかる。

もう一人の深沢はふかざわと読む深沢潮（うしお）。年末の従軍慰安婦をめぐる新聞記事で知った作家だ。卒論を読む合間に『ひとかどの父へ』『ハンサラン 愛する人びと』（後者は『縁を結うひと』のタイトルで再刊）を一気に読んだ。夏衣を引き継ぐかのような潮、これからどのような作家へと歩みだしていくのか気になっている。

講談社 オランダ語辞典

P.G.J. van Sterkenburg / E.J. Boot 財団法人日蘭学会 講談社

オランダに行ってきました。1820年代のオランダの美術館の収蔵作品を調査するのが目的です。フランス革命後、皇帝の位に就いたナポレオンは、近隣各国への侵略を開始し、大量の美術品を略奪してルーブルに運びました。1820年代というのは、ナポレオンの失脚を受けて、これらの作品が各国へと変換され始めた時期です。オランダの美術館は、こうして返還された芸術作品をどうやって保存・管理・展示するかという課題と直面します。この経緯を、G.W.F.ヘーゲルのベルリン大学での芸術哲学講義との関係で研究しようという試みです。たくさんの資料を撮影したり購入したりしてきました。ところが！！ 大半がオランダ語なのですね。購入できる資料の大半には、英語版やドイツ語版もあるので問題ないのですが、1820年代の原典資料はオランダ語ばかりです。仕方ないので泥縄なのですが、オランダ語の勉強を始めました。

紹介する辞書は、日本で出版されている唯一といってもよい、実用に耐えるオランダ語辞典なのですが、これが面白いのです。特に、本文中に埋め込まれた大量のコラムがすごい。コラムを拾い読みしていくと、江戸時代の蘭学の歴史が分かってしまうのです。例えば、アキレス腱について、杉田玄白らの『解体新書』での訳語が紹介され、杉田らはギリシア神話のアキレウスについては知らないまま、解剖学上の組織の名前としてこれを訳したらしいことが紹介されている、といった具合です。

この辞書を見せたところ、語学好きな学生が一言。「この辞書をオランダ語に訳してオランダ人に読ませたい！」オランダ語=日本語辞書だから蘭和辞典ですが、これをオランダ語に訳すと、和蘭辞典になるのかしら？ でも和蘭はそれだけでオランダの意味だよねえ……おあとがよろしいようで。

キャロル

パトリシア・ハイスミス 柿沼瑛子訳
河出文庫（河出書房新社）

最近、これを原作とする映画が公開されて、評判になっているので、ご存じの方もいると思いますが、1950年代のアメリカにおける女性の同性愛を描いた作品です。

当時のアメリカでも、男性に管理されない女性の性は厳しい非難の対象となっていました。法的にも社会的にもレスビアンは迫害されていました。ハイスミスは自身の体験も踏まえながら、夫との葛藤や娘への愛情に苦しむ年上の女性と、彼女にひかれていく若い舞台芸術家志望の女性の関係を、時には美しく、時にはスリリングに描いていきます。

当然、1950年代では、レスビアンのカップルにハッピー・エンドなどありえませんでした。しかし、ハイスミスは悩みながらも、この物語をハッピー・エンドに終わらせます。これは未来に対する彼女の希望のメッセージなのでしょうか？ それとも、現実を直視しない夢物語に過ぎないのでしょうか？

いずれにもせよ、私たちはここから多くのことを学ぶことができます。今でこそ日本でも、LGBTという言葉が市民権を持ち始めました。しかし、LGBTは性的マイノリティーのすべてを包摂する概念ではありません。しかも、2015年度の卒業研究の中で学生の一人が明らかにしたように、性的マイノリティーの各グループが相互に連帯できているわけでもありません。むしろ、バラバラなのだといった方がよいでしょう。事柄を他人事だと考えてはいけません。「世界中のだれか一人でも不自由であるなら、私は決して自由ではないのだ」と、アルベール・カミュがエッセーのどこかで述べています。マイノリティーの自由はすべての人間の自由と連動しています。自由になりたいのなら、他人の不自由について敏感にならなくてはなりません。

そういうわけで、ぜひご一読を。

方丈記

鴨長明 浅見和彦校訂・訳
ちくま学芸文庫（筑摩書房）

昨年は授業で『方丈記』を取り上げ、岩波文庫で読んでもらったのですが、こちらはちくま学芸文庫の一冊。岩波文庫だと、「出家が望ましい」と言いながらずると五十歳過ぎまで世俗の栄達を望んでいた、だらしない、潔くない、修行が足りない、ダメな鴨長明、というスタンスで編集が行われているのですが、こちらは反対に、メモ帳片手に大災害と戦乱の京都の街を調査して歩く行動派の鴨長明が描かれています。大絶賛です。日本文学始まって以来の初の「災害文学」とまで評価します。岩波文庫だと、鴨長明の美文には下敷きがあって、古典のパクリだ、と最低の評価。一方ちくま学芸文庫だと、当時の同じ災害についての他の貴族の日記や文書と比較して、鴨長明のあげる死者の数や被害の実態についての正確さを検証し、数学や統計に熟達した実務家として最高の賛辞を贈るのです。ここまで対照的だと、同じ古典を読んでいる気がしなくなります。比べて読むことをお勧めします。（本学図書館所蔵）

地球の住まい方見聞録

山中知彦 芙蓉書房出版(2015)
税込 2,592 円 (本体 2,700 円)

自著を推薦するというのも厚かましいが、読んでもらいたいから書くというのが著書という意味でお許しを。

本書は国際地域学部「地域社会論（旧地域環境学）」の 5 年間の講義で編み出された紀行エッセイ。6 年前にこの大学に赴任し、講義材料や演習のフィールドを求め、足元の海老ヶ瀬から粟島へ、そして日本海を渡りアジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカを経て FUKUSHIMA に至る旅の過程で「地域」を探る。授業では聴くことのできない試行錯誤が語られ、教員も君たち同様発展途上であることを伝えようとしている。(本学図書館所蔵)

音とことばのふしぎな世界

——メイド声から英語の達人まで

川原繁人 岩波書店

我が家の白黒テレビでゴジラと一緒に見た近所の子が、あまりの怖さに一人で家に帰れなくなった。しかたなく薄暗くなった50メートル程の道のりを一緒に歩いた。ゴジラのあのギョロツとした目がいけなかった。あの恐ろしい目を思い出さないようにして飛ぶように家に戻った。半世紀も前のことである。

あの凶暴で恐ろしい怪獣が「ゴジラ」ではなく「コシラ」だったらどうだろうか、と著者は問いかける。「ガンダム」でなく「カンタム」だったら？濁音には何か特有のイメージがあるようにも思える。かつて子供たちを震え上がらせた怪獣が「コシラ」だったら、見る者を睨み付けるあの目、何者をも寄せ付けぬあの破壊力は果たしてあっただろうか。音とそれが表すイメージとの間に関係があるとする音象徴についての話から始まり、ふしぎで興味深いことばと音声の世界へと我々を誘ってくれる。様々な音声実験を踏まえての説明には説得力があり、音響や音声知覚というこれまで敷居が高く感じられてきた領域への興味をもかき立ててくれる。振り込め詐欺が後を絶たないのも、電話で耳にする「声」に一因があるのではないかと指摘する。様々な理由で「声」を失ってしまう人々の中には、なんとか自分の声を残し自分の声で人と話がしたいと願う人がいる。このような人たちの願いを叶えようとする取り組み（マイボイスというフリーソフトウェア開発・普及）にも、言語学や音声学は貢献できると力強く締めくくっている。音とことばへの新しい見方・考え方を提供してくれる一冊である。（本学図書館蔵）

愛人 ラマン

マルグリット・デュラス 清水徹訳
河出文庫(1992)

仏領インドシナを舞台としたデュラスの傑作。清水徹の翻訳が素晴らしい。小説とは語り口がすべてであることを実感させてくれる1冊。

これで駄目なら：若い君たちへー卒業式講演集

カート・ヴォネガット 円城塔訳
飛鳥新社(2016)

卒業おめでとう。ヴォネガットを読んでください。

キヨミズ准教授の法学入門

木村草太 星海社

気鋭の憲法学者が、高校2年生や大学准教授などの登場人物による物語形式でわかりやすく法学の内容を説明した本です。高度な内容ですが、面白く読むことができます。

放射線被曝の理科・社会 四年目の「福島の実実」

児玉一八・清水修二・野口邦和 かがわ出版

いちから聞きたい放射線のほんとう いま知っておきたい22の話

菊池誠・小峰公子 筑摩書房

この2冊は、福島第一原子力発電所事故を受けて、一般の人々に、放射線や、放射線被曝についてわかりやすく解説している本です。

ものの言いかた西東

小林隆・澤村美幸 岩波新書

日本語の方言の違いには、音韻や語彙・文法などの他に、発想法の違いもあることを、小林らが明らかにした。ものの言いかたに関する志向や好みに地域差があるというのである。あることを口に出して言うか言わないか、場面に応じて一定の決まった言いかたをするかどうかなど、7つの発想法の地域差があることを示し、その生まれた背景や要因を探っている。方言における異文化コミュニケーションの摩擦を避けるためにぜひ一読してほしい。

日本国憲法を生んだ密室の九日間

鈴木昭典 角川ソフィア文庫

比較のなかの改憲論－日本国憲法の位置

辻村みよ子 岩波新書

改憲論議がかまびすしいが、日本国憲法がどのようにして生まれ、世界の憲法の中でどのような位置にあるのか、必ずしも知らないのではないだろうか。私はかつて日本国憲法の男女平等の条項の草案を書いたベアテ・シロタの本をどこでもドアのかぎで推薦したことがあるが、最近上記の2冊の本を読み、あらためて現行憲法がめざしたものの意味を理解することができた。また、日本国憲法成立の背景に戦時中の米国における日本研究の蓄積があったことや、日本国憲法が世界の憲法史で重要な位置を占め、日本国内で民間の作成した憲法草案の系譜の中に位置づけられることなど、新たに知ったことも多い。前者はテレビ番組のプロデューサーによって書かれ、後者は比較憲法・憲法学の専門家によって書かれたもので、対照的だが、この順に読むとよりわかりやすいだろう。

突然ノックの音が

エトガル・ケレット 母袋 夏生訳
新潮社(2015)

イスラエルの作家の短篇集。何の予備知識もないまま読み始めたのですが、面白くてあっというまに読み終わりました。一番面白かった話、を選ぶのが難しいのですが、これからも何度も思い出しそうなのは、「創作」（の中で主人公が書いているお話）、「終わりのさき」（の結末）、「グアバ」などでしょうか。ロシア人が当たり前のようにたくさん出てきたのも、別の意味で面白かったです。

死ぬまでに決断しておきたいこと 20

大津 秀一
KADOKAWA/メディアファクトリー(2015)

題名から受ける（であろう）印象とは大きく異なり、死ぬ準備をするための、あるいは死が近づいたと感じている人のための本ではなく、「生きる」ための本です。かけがえのないものを失ったり、生きるのが辛くなったりすることがあったら（ないように祈りますが）、開いてみてください。力強く支えてくれると思います。私は、第5章、特に216ページに救われました。

献灯使

多和田 葉子 講談社(2014)

そして。

人は何のために生きるのか—この問いにはおそらく「正解」はないのですが、このような本を読むために、というのは、答の一つになるかもしれません。そう思わせてくれるような、すばらしい本でした。

特集

戦争の本・平和の本

The Girl with the White Flag: A spellbinding account of love and courage in wartime Okinawa.

Tomiko Higa. Kodansha, USA.

Looking Like the Enemy: My Story of Imprisonment in Japanese- American Internment Camps.

Mary Matsuda Gruenewald. NewSage Press.

2冊とも、昨年夏に海外英語研修Bの引率で行ったハワイの真珠湾の売店で購入しました。1冊目は、1945年戦場となった沖縄で白旗を掲げて米軍に投降した7歳の少女の手記で、家族とはぐれ一人になった少女がどのように戦場をさまよい生き抜いたか、白旗をどうして掲げることになったかなどが書かれています。2冊目は、真珠湾攻撃後のアメリカで家族とともに収容所に送られた16歳の日系人少女の手記で、当時の日系人の生活や考え方、戦時中のアメリカでの日系人社会に対する眼差しや実際の取り扱いなどが克明に描かれています。真珠湾には、真珠湾攻撃で撃沈された戦艦アリゾナの記念碑と、降伏文書の調印式が行われた戦艦ミズーリの両方があり、その場所自体が戦争と平和について考えるのに良い場所ですが、そこでこの対照的な2冊を見つけたのです。ホテルに帰ってから、あるいは空き時間を見つけては読みふけりました。二人の少女は、太平洋をはさんで全く異なる戦争体験をし、それを綴っていますが、一方で、極限的状況における人間の尊厳というものも描かれていて、一気に読んでしまいました。比嘉さんの手記は、1989年に比嘉富子『白旗の少女』として講談社から出版されたもので、同時期にアメリカでも翻訳版が出版されたものと思われます。現在はこの日本語版が講談社青い鳥文庫に収められていて入手することができます。Gruenewaldさんの手記は、翻訳はないようですが、Amazonで原著のKindle版が入手できます。2冊ともSALCにありますので、ぜひ手にとってみてください。

時間

堀田善衛 岩波現代文庫(2015)

堀田善衛の本は大学時代、生協の書店でよく平積みされていた。21世紀になってからは上海時代の戦中日記で注目され、311後に『方丈記私記』が話題となった。そして辺見庸の尽力で2015年末に『時間』という未知の作品に出遭うことができた。南京侵略前後の時間を、中国人男性の視点から描いている。集英社「戦争×文学」シリーズにも被支配者の視点から書かれた小説（湯浅克衛や坂口禮子などの作品）が収められているが、手に取りやすいこの種の本は貴重である。なぜこうした小説がもっと書かれてこなかったのだろうか。改めて考えてしまう。

千の輝く太陽

カーレド・ホッセイニ 土屋政雄訳 ハヤカワ epi 文庫(2014)

過去半世紀、アフガニスタンで何が起こっていたのかを知ることのできる小説だ。ヤスミナ・カドラの『カブールの燕たち』も良質の小説だったが、アフガニスタンという場所の描写が期待したほど浮き立ってこなかった。『千の輝く太陽』では独裁体制下の女性の苦しみ、逃避、そして反逆が描かれる。安住の住み処などどこにもない世界がソ連崩壊の近づいた頃からこれほどに広がったのだ。冷戦とは何だったのか。2015年1月のパリで起こったシャルリー・エブド襲撃後に出版されたミシェル・ウエルベックの『服従』は、この苦境を作り出した側も同じポスト冷戦の構図にはまり込んでいく経緯が描かれた。冷戦時代の遺制は世界に何をもたらししていくのだろうか。

命こそ宝：沖縄反戦の心

阿波根昌鴻 岩波新書

国益を人の命よりも大事なものとするなら、戦争はさけられないだろう。逆に、人の命よりも大事なものなどないとするなら、戦争だけは絶対にしてはならない。反論する人もいるだろうが、戦争の準備こそが戦争をさけるのだというのは詭弁だと思う。子どもたちに人殺しの訓練をさせること、殺してもいい命があると教えること、戦争できる法整備を進めること、そしていざとなったら戦場にその子どもたちを送り込むこと、それが戦争を避ける方法だとは、私にはどうしても思えない。『命こそ宝』の著者である阿波根（あはごん）さんは、沖縄戦で最愛の一人息子を亡くした。畑を失い、家を失い、何もかもを失った。戦争準備に協力した結果だった。阿波根さんは、沖縄戦というこの世の地獄を生き延びた後、沖縄を占領した米軍に裸で立ち向かった沖縄の農民である。正確には、「米軍に」ではなく、「戦争に」立ち向かった農民であると言うべきである。阿波根さんが戦争準備に協力することは、二度となかった。阿波根さんは戦争を根っこから引き抜こうとした。「命こそ宝」という言葉を聞いて、陳腐だと思える人もいるかもしれない。それで、かまわない。まず阿波根さんのこの本を読んでほしい。米軍という巨大な権力に対して、一人の農民の存在とはあまりにも小さい。しかし、一対一で向き合っ、阿波根さんと議論して勝つことのできた人は米軍には一人もいなかったと私は思う。真実はどこにあるのか。本気で真実を求める人間がいる場所にしかないと思う。(大学図書館所蔵)

苦海浄土：わが水俣病

石牟礼道子 講談社文庫

戦争の本質が人の命を手段にすることだとしたら、私たちの日常のなかにも戦争は存在する。そのことを如実に示しているのが、水俣病という殺人である。利潤追求や経済成長という目的のために、人間の命が捨てられたのである。企業が流す毒で動物や人間が死んでいるのに、水銀は流され続けた。原因企業も国も知らんぷりをした。驚くべきことに、水銀の排出量は、水俣病の公式発見後に増加していく。企業や国は、人を殺しながら、さらに利潤追求のアクセルを踏み込んだのである。私は、『苦海浄土』を、福島原発事故後に読んだ。無性に読みたくなった。そして、それ以来、何度も読み返している。福島でも、まだ放射能は止まっていない。地下水にまじって海に流れ続けている。またしても、私たちは知らんぷりをしていないだろうか。水俣の水銀が完全に止まったのは、新潟で同じ「殺人」が繰り返された後だった。今回も同じ道をたどるというのか。冗談ではない。『苦海浄土』のなかには、死霊や生霊たちの言葉が宿っている。恐るべき言葉たち。声なき生者や死者や動植物や海の声聞きとること。その声の現場に立ち会うこと。私たちの日常のなかにある「戦争」を止めることなくして、私たちに平和はないだろう。(大学図書館所蔵)

ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？： ベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争」

アレン・ネルソン 講談社

アレン・ネルソンさんは、ベトナム戦争に参加した元海兵隊員であり、帰還兵である。彼は、戦争を生き延びることはできたが、帰国後PTSDという精神疾患に苦しめられ、最後には枯葉剤の影響が疑われる病で命を失った。本書は、そのネルソンさんが子どもにもわかる言葉で自分の戦争体験と人生を語った本である。ある小学校の教室で、ある子どもがネルソンさんにたずねた。「あなたは人を殺しましたか？」子どもは真実を知る権利がある。そう考えたネルソンさんは、嘘がつけず、長い沈黙のあと「はい」と答えた。彼の人生は、ここから始まった。戦争で人間であることを破壊されたあと、ここから彼の人間であることを取り戻す旅が始まるのである。この本には、私が決して忘れることのできない一つの印象的なエピソードが語られている。彼は、戦場でたくさんの人々を殺したが、その戦場である特異な体験をするのである。その内容はここには書かないが、彼はこの体験をした後、人を殺すことができなくなる。人は、人を殺しさえすれば、慈しみもする。どちらが根源的なのだろう？彼の戦争体験／戦後体験を語る言葉には、人間という存在への根本的な洞察があると思う。(大学図書館所蔵)

日本は、本当に平和憲法を捨てるのですか？

C・ダグラス・ラミス 平凡社

私は、憲法というものがどういうものなのか、その意義は何なのかをこの一人のアメリカ人から教わった。そして深く影響を受けた。海兵隊員として沖縄で訓練を受けた後除隊し、日本でも学び、津田塾大学で教鞭を取ったこともある政治学者、ダグラス・ラミスさんである。昨年、私は沖縄在住の彼に手紙を書き、12月には本学での講演が実現した。私はこの体験を一生忘れないだろう。この本は、彼が書いた本のなかでも、おそらく最も小さく、そして最も本質的な仕事ではないだろうかと思う。大人から子どもまで読める。ざっと読めば20分で読める。しかし、一度読めば、あなたはずっと考え続けることになるだろう。今年、私たちの政府は、多くの国民が「憲法違反」と声をあげるなか、安保関連法なる戦争法を制定した。もちろん、これに賛成の人もいるだろう。でも、賛成だと思っても、ぜひ読んでほしい。20分で読めるのだから。人は、人の考えを変えることはできないし、そんなことをすべきではないけど、自分の考えを深めるためにはさまざまな考えに触れるべきです。もしこの本を面白いと思ったら、次は『戦争するってどんなこと？』（平凡社）に進んでみてほしい（大学図書館所蔵）。ラミスさんの本を読むと、ものごとを本質的に理解している人は、子どもにもわかる言葉で語れるのだなあと思う。子どもの目を見てしっかりと自分の考えを話せる大人になりたいです。

野火

大岡昇平 新潮文庫

人間は時として人間の肉を食べる。この事実には圧倒されない人はいないだろう。大岡昇平の『野火』は、戦争小説であるが、普遍的な次元でこの問題に向き合う作品である。大岡自身、太平洋戦争中、フィリピンでの戦場体験があり、そこで彼が目撃した現実とは、人間が人間でなくなるこの世の地獄だった。戦争は怖い。しかし、人間が人間でなくなること、自分が人間であることをやめてしまうこと、この恐ろしさは、どう表現したらいいだろう。先日、テレビを見ていたら、戦後、シベリアでも「人肉事件」があったという。ソ連軍に拘留された日本人三人がそこから逃亡したが、途中、飢えのなか二人は一人を食べたという。犠牲になったのは身体の弱い人物だった。結局、二人は捕まり、連れ戻されたが、荷物から出された人肉を見たというひとりの朝鮮半島出身の人物の言葉が心に残っている。彼は、こう語った。人を食べるか、それとも食べられるかの選択があるとしたら、食べられる方がいい、その時にそう思った。私は、どうだろうか。あなたは、どうだろうか。たった 70 年の歳月で人間は根本的に変わったりしない。だからこそ、歴史を知った人間として、安易な希望ではなく、最も見たくない絶望を見据えて、私たちは今を選択しなくてはいけないと思う。

きけわだつみのこえ

日本戦没学生記念会 岩波文庫

いろいろなことが自分のなかでもやもやしていた浪人生のときに読みました。高校ではほとんど触れられなかった戦争のもたらすことを、当時の自分と同世代の学生たちの思いを、つきつきられました。無念さを忍ばせながら、学問への思い、家族への思いが切々と綴られています。特攻兵として飛び出すその直前の心うちです。歴史から学び、平和な社会を子どもに残していけるように、学生が学生として学校で学べる当然な社会を残していけるように、いまできることをしていきたいと思えます。

アウシュビッツの音楽隊

シモン・ラックス、ルネ・クーディ 大久保喬樹訳 音楽之友社

アウシュビッツには収容者たちで組織されたオーケストラが存在していました。収容者が強制労働に出かける時、ガス室に送られる時、また将校の宴席の場でも、音楽家たちはクラシック音楽を演奏しました。彼らは楽器を弾くことができたために生き延びることができ、もしこれを断ると強制労働・ガス室送りが待っていたため、音楽家たちは収容所での過酷な労働や暴力、飢え、いつ殺されるかという恐怖の中、多くの命が奪われていく悲しみに耐えながら、演奏をしました。極限状態での演奏とはどのようなものだったのでしょうか。私には想像できません。

戦後、彼らをさらに苦しめたのは、「自分たちはユダヤ人を裏切った。自分が生き残るために演奏し、ナチス幹部を喜ばせた。ユダヤ人を苦しめている人々を喜ばせて、自分が生き残る選択をした。」という思いで、その後の人生において、メンバーの誰もが楽器を奏でることも音楽を聴くこともできなくなってしまったということです。

ナチを生き延びたドイツ民族と犠牲となったユダヤ民族、両者ともに深く音楽と結びついていた民族であり、素晴らしい音楽を生み出してきた民族であるのに、その音楽が平和のためでなく、戦争のために利用され、悲しい悲劇を生み出したというのは皮肉としか言いようがありません。今後、誰からも規制されることなく、自由に音楽や芸術を表現できる世の中が続いてほしいと心から願います。

皆さんもこの本を読んで、音楽・芸術と平和・戦争について考えてみてください。
(本学図書館所蔵)

永遠平和のために

イマヌエル・カント 宇都宮芳明訳 岩波文庫

君主論

ニッコロ・マキアヴェッリ 河島英昭訳 岩波文庫

完訳 統治二論

ジョン・ロック 加藤節訳 岩波文庫

社会契約論

ジャン・ジャック・ルソー 桑原武夫・前川貞次郎訳 岩波文庫

国家と革命

レーニン 角田安正訳 講談社学術文庫

近年問題になっている様々な論点については、いろいろな先生がそれぞれのお立場からご推薦くださると思いますので、私は、基本中の基本を押さえておきたいと思います。なぜなら、基本を抜きにして論じると、現状の既成事実の容認にしかならないからです。状況分析が有効なのは、原理的な考察がある場合だけですから。

というわけで、議論の出発点を確認しましょう。それは古典です。我々の現在の社会が前提としている近代国家について知らなくてはなりません。そして、近代国家が原理的に戦争なしに成り立つものなのか否かを考えなくてはなりません。まずは古典を読むことです。そうすれば、国家という巨大にして、場合によっては凶暴にもなる権力装置をどうやれば使いこなせるのか、というのが近代の国家論の焦点であって、憲法がこの権力装置の暴発を防ぐための仕組みであったことは一目瞭然となります。すべての議論はこの確認の上に組み立てられなくてはなりません。この理論的前提を無視しては、改憲も護憲もないのです。もちろん、古典はこのほかにたくさんあります。フィヒテの『閉鎖商業国家論』もそうだし、ヘーゲルの『法哲学』もそうです。モンテスキューの『法の精神』、ホッブスの『リヴァイアサン』もそうです。とにかく古典です。古典を読まない人間に政治など任せてはなりません。

モーツァルトとナチス 第三帝国による芸術の歪曲

エリック・リーヴィー 高橋宣也訳 白水社

オランダでの調査を終えてからミュンヘンに向かいました。19世紀の初めのドイツで膨大な絵画コレクションを作り上げたポアスレ兄弟についての資料を調査するためです。

ミュンヘン中央駅の北に美術館が立ち並ぶ地区があります。この一角にアルテ・ピナコテークがあります。ポアスレのコレクションの大半は、現在この美術館にあります。文献調査は、しかし、その近くにある美術史中央研究所(Zentralinstitut fuer Kunstgeschichte)の書庫で行いました。ところが、この研究所の建物と現在ミュンヘン音楽大学となっている建物こそ、ミュンヘンにおけるヒトラーの豪邸だった建物なのです。

ブリーナー通りを挟んでシンメトリーに建つこの新古典様式の二棟の同じ形の建物はブリーナー通りに直交するカタリーナ・フォン・ボラ通りに面していて、その通りの反対側は、国王広場(Koenigsplatz)です。この国王広場で、ヒトラーは焚書を行ったのでした。

芸術のための研究所や音楽学校として化粧直しすれば、ナチス・ドイツの負の遺産でも浄化される、と言えるでしょうか？ ヒトラー好みの新古典主義の建物の玄関ポーチ天井には、ハーケンクロイツをモチーフとした装飾が今でもそのままに存在しています。そのように意識して見ると、この建物がいかにも寒々しいものに感じられてきます。もっとも、その夜半からミュンヘンでは粉雪が舞い始めたのもあったのですが。このうそ寒さを払拭すべく、ヒトラー邸の地下の書庫（この書庫は夜の8時まで開放されています。入館者名簿に名前を書けば、外国からの旅行者でも利用可能です）から生還した私たちが、急ぎ足でビアホールに駆け込んだのは、言うまでもありません。もちろん悪酔いしましたが。

全体主義と芸術は奇妙な関係にあったといわなくてはなりません。ナチスは芸術さえも歪曲して政治的に利用したのでした。ここで紹介している『モーツァルトとナチス』は、ナチスがモーツァルトを「ドイツ民族の偉人」として宣伝することで、モーツァルトを政治的に利用したことを立証する書物です。しかし、モーツァルトの音楽はナチスには都合の悪い部分も含んでいました。たとえば、晩年のモーツァルトとフリーメーソンの関係など。ナチスはこうした都合の悪いところを隠蔽しようとしています。芸術がどのようにゆがめられていくのかが、本書を通してよくわかります。巻末には、1941年12月4日にウィーン国立歌劇場でゲッベルスが行った「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト没後150周年記念演説」が付録として収録されています。

～放射能汚染との戦い・平和だったかつての暮らし～

国際地域学部 国際地域学科 山中 知彦

もどれない故郷（ふるさと）ながどろ —飯館村帰還困難区域の記憶—

長泥記録誌編集委員会編 芙蓉書房出版(2016)
税込 2,592 円（本体 2,400 円）

東京電力福島第一原発事故から5年 原発から最も離れた帰還困難区域「福島県飯館村長泥行政区」の74世帯281人の人々は“戻れないふるさと”への思いを断ち切れずに苦しんできた。

本書は、風化しつつある被災地長泥の生活の記憶を後世に伝えるために 住民たちが積極的に関わってつくられた記録誌だ。

「第1部 写真で見る長泥」は、家々のアルバムから剥がされた写真と、事故後現地取材し続けている写真家の作品をもとに編集。共に生きてきた地域の歴史が浮かび上がってくる。

「第2部 聞き書きでたどる長泥」は、住民と密接なコミュニケーションをとり続けてきた大学教員・ジャーナリスト・自治体職員らによって実施された聞き取りなどをもとに編集。住民同士の結束力の強さ、ふるさとへの深い愛着などが行間から滲み出てくる。(本学図書館所蔵)

それでも飯舘村はそこにある一村出身記者が見つめた故郷の5年

大渡美咲 産経新聞出版(2016)
税込 1,404 円 (本体 1,300 円)

飯舘村で3女1男の長女として両親の愛情を受けて屈託なく育ち、新聞記者として歩み始めて5年、東京の警視庁付き記者となっていた筆者は、原発事故に見舞われた故郷の取材へと向かった。事故後の5年間、村出身記者として、両親や同級生をはじめ多くの関係者の放射能汚染との戦いの取材を続け、等身大で淡々と語る文章から、何が奪われたのかがあぶりだされる。

「取材を続けると、書かねばならないことが増えていった。伝えなければならぬことの連続だった。それは、私のよく知っている村の話だからだろうか。縁のない土地だったら、そこまで思えただろうか。自問しても答えは出ない。ただ、福島の実情をもっと知ってもらいたい。飯舘村の人々の思いを知ってほしい。その気持ちに変わりはない。記者である前に、飯舘村をふるさとに持つ者の一人として」(「はじめに」より) (本学図書館所蔵)

Vietnam Requiem:

By the Photographers Who Died in Vietnam and Indochina

Horst Faas & Tim Page
Jonathan Cape(1997)

ホーチミン市の戦争ミュージアムでみて深い感銘を受けました。ラリー・バローズ、アンリ・ユエ、そして沢田教一、戦争を理解するうえでの「写真」の重要性と可能性を再認識させてくれる1冊。

帰還兵はなぜ自殺するのか

デイヴィッド・フィンケル 古屋 美登里訳
亜紀書房(2015)

戦場はもちろん、人が人を壊そうと力を尽くす場所ですが、そこから生還した者にも深い爪痕を残さずにはおかないのだということを、実はあまり認識していませんでした。イラクから「生きて」帰ってきたのに次々と自殺してゆくアメリカ兵たち。苦しむ帰還兵とその家族を丁寧に追った、読むだけでも苦しく、痛くなるようなドキュメンタリーですが、誰かを戦場に送ろうという人は、せめてこの本を読んでから議論を始めるべきではないか、と思います。